

マッセ・市民セミナー

(ちゃいるどネット大阪・マッセOSAKA共催講座) (北摂ブロック)

## 家庭・地域との連携による子育て支援 ～子どもの成長を共有するお便りづくり～

山下文一氏  
(松蔭大学)

\*\*\*\*\*

日時：平成30年6月25日(月) 14:00～16:30

会場：豊中市立豊中人権まちづくりセンターホール (4階)

松蔭大学の山下ですよろしくお願ひします。

まず、最初にかるいウォーミングアップから入りましょう。では、隣の方と二人組になって、じゃんけんをして勝ち負けを決めてください。

それでは、説明します。まずじゃんけんで勝った方は、これから前に映し出す写真をしっかり見てください。負けた方は、わたしが「よい」というまで目を閉じていてください。

そして、写真を見た方は、その写真を説明してください。説明を受けた方は、それを絵で表現してください。これを交互に行います。質問はありませんか。それでは、始めます。

\*\*\*説明を聞き絵で表現する\*\*\*

とても立派な桜の木ですね。皆さんは花見に行くことと思いますが、大抵の人は「桜がきれい」と花の美しさに感動します。しかし、「この根っこはすごく伸びているな。どこまでいっているのだろう」という人はあまりいません。ところが大事なのは根っこなのです。大きな実を付けて花を咲かせるのは、しっかりと根を張っているからです。暴風雨が来ても倒れない、しっかりとした根があるから毎年美しい花を咲かせることができます。まさしくこのことを今大切にしなければならぬと思います。私たちは、ついつい目に見えるものに目がいきがちです。保護者も同じで、子どもの「できた、できない」を気にします。人より逆上がりができるとか、人より劇がうまくできたとか、そういう出来栄を気にします。しかし、私たちが本当に大切にしなければならぬのは、そこまでの過程です。その子の努力があるからこそ、結果として逆上がりができるようになる、その努力したところに値打ちがあります。たとえ出来なかったとしても、その

努力する過程、挑戦する過程にこそその子の育ちがあるのです。そこをしっかりと理解し、その力をさらに育む支援を行うことにより、その子の根っこがどんどん伸びていきます。そのためには、子どもをしっかりと理解することが大切です。例えば、発表会がどの園でも行われていますが、発表会は、保護者が見て喜んだり、記念にビデオで撮影するためにしているではありません。まして、保育者が満足するためにやっているではありません。発表会という場を使い、子どもたちの生きる力の基礎を育むという大きな目的があります。浦島太郎の劇をやりたいといった子どもたち、保育者がやっごらんと言うと、子どもたちは喜んでやります。すると、「僕は浦島太郎をやりたい」「僕はカメをやりたい」「私は乙姫をやりたい」という子もいれば、面白いことに「コンプをやりたい」という子もいます。あるいは、「岩の役をやりたい」という子もいます。自分がやりたい役柄を自分で考え、自分で決めていくのです。このとき、「コンプは浦島太郎の話で出てこないからだめ」と保育者が否定してはだめですね。決めていく過程で、浦島太郎の希望者が8人、カメの希望者が2人になります。いざ、練習を始めると、カメが8人の浦島太郎を竜宮城へ連れていかなければいけないので疲れてしまう。そこで、竜宮城を2～3m先にしてくれというわけです。そうすると、浦島太郎から竜宮城は海の底なので「そんな近くじゃ駄目だよ」という意見が出される。するとカメは「じゃあ僕、カメはやらない」という話になってしまう。そこで、どうするかという話し合いが始まるのです。このことこそが大切です。自分たちで問題を解決しようとするのが…。そうすると、浦島太郎の中から「仕方がないな。じゃあ僕がカメをやるよ」という子が出てきます。そしてカメが4人ぐらになり、浦島太郎が5人ぐらになっていきます。そうやって子どもたちが自分たちで考え、折り合いをつけながら自分たちの劇をつくっていく。主体的に取り組んでいくのです。アクティブラーニングですね。そして発表会の当日を迎えると、子どもたちは非常に生き生きとしています。自分が大好きな役だから、やりたい役をやっているからです。保育者に命令されてやっている役ではないので、台詞も堂々と言うことができます。

保育者がしなければならないことは、その子どもたちの学びの過程をしっかりと支援をしていくこと、そしてこの取り組みの中で育まれている子どもの育ちの姿を家庭と共有することです。例えば、「今日は浦島太郎役が8人とカメ役が2人いて、カメ役の子がストライキを起こして困りましたが、そこで〇〇君と〇〇君がカメになってくれました。なんて優しいのでしょうか。こういう力は大人になると必要です。今日はとても大事な芽生えがあった瞬間でした」と子どもの育ちや頑張りを伝えるので、保護者も興味を持ちます。つまり、子どもの育ちを共有することです。これが、これまで以上に私たちがやっごらなければいけないことです。これからは、家庭と子どもの育ちを共有し、その育ちをともに喜ぶということがこれまで以上に大切です。

挨拶が進んでできる子どもになってほしいと思っても、園だけの努力では十分ではありません。挨拶というのは、朝起きたときに、お母さんやお父さん、あるいはおじいちゃんやおばあちゃんが「おはよう。天気がいいよ。今日も頑張ろうね」と言ってくれ

て、起きる。そして登園すると、大好きな保育者や友達が「おはよう」と言ってくれる。降園するときには、友だちが「また明日ね。バイバイ」と言ってくれる。保育者も「今日も頑張ったね。明日も元気で登園してね。さようなら」と言ってくれる。この一連の生活の中で、挨拶の大切さや挨拶をすると気持ちいいということを実感するからこそ挨拶が身に付いていくのです。

今、少子化や核家族化が進む中で、孤立した子育てをしている保護者が多くいます。私たちはその現状を踏まえ、保護者育てをやっていかなければいけません。今の保護者世代は、地域で群れて遊んだり、兄弟の面倒を見たりするなどの経験が少ないと思います。ですから、どうしてよいかわからないのです。手がかりが少ないのですね。ですから、そういう経験をしっかりと積ませてあげなければいけません。それが私たちの仕事のひとつだと思います。皆さんが日々向かい合う子どもたちの豊かな育ちを保障していくためには、保護者支援は欠かせないのです。

それでは、交代します。先ほど目を閉じていた方は、前に示すスクリーンを見て相手に伝えます。先ほど伝えた方は、目を閉じていて待っていてください。ただし条件があります。土の中にある根っこを想像して伝えてください。それ以外は話してはだめです。今度絵を描くときは、聞いた根っこのイメージから上の部分を描いて下さい。

### \*\*\*説明を聞き絵で表現する\*\*\*

私たちが伝えなければならないことは、この根っこについて話さなければならないのです。何かができた、できないという話ではなく、子どもの育つ姿を伝えることです。

例えば園の方針について、4月か5月に保護者が集まったときに「わが園の今年の目標は、たくましく、立派な子どもたちの育成です」と説明したり、「日々、子どもはこういうふうに育っています」と伝え、説明しているはずです。つまり、説明責任を果たしているのです。しかし、その説明責任は、相手が納得して初めて果たされます。私たちは、保護者に対して何か伝えるときに、本当に保護者が私たちの言っていることを理解し、納得しているかということをきちんと確認しなければいけません。私が園にお邪魔すると、職員室で「保護者にわかってもらえなくて困った」ということを聞くことがあります。それは、保護者が悪いのではなく、私たちがきちんと保護者が理解し納得するように伝えていないからです。

子どももそうです。子どもに対して「何度言っても分からない」と嘆く保育者がいます。子どもというのは、実感できて初めて理解することができます。今日言ったから明日できるわけではありません。大人は「昨日も言ったでしょう」と言いますが、言うだけでは、子どもは理解することができません。大事なものは、相手が納得して理解することができる。あるいは、実感として分かることを大切にしなければならないと思います。

私たちがこれからやらなければいけない子育て支援は、一時的な対応だけではありません。保護者が子どものより良い育ちに向かって努力していける支援をしなくてはなりません。保護者は「先生、うちの子はこれができるんです。あれができないんです。」と、子どものマイナスの部分を見ることが多いときがあります。しかし、よく見れば、その子にはいいところがたくさんあります。そういうことを保護者に気づいてもらうことを大切にしていかなければならないと思うのです。

もう一つ大事なことは、保護者が自己決定できるようにしてあげることです。「お母さん、こうなさい」、「私がやりましょう」というのはよくありません。お母さんの思いや悩み傾聴しながら、心に寄り添いながら、お母さん自身が自らを振り返り、「先生、私、こうしてみようと思います」と、自分が子どもにどう向き合うかを考えていく。それに向けて私たちが支援していくということを大切にしてほしいと思います。

例えば、家庭的な事情で夜遅くまで働かなければいけない保護者は、親子読書をやってくださいと言われてもできません。家に帰り着いたころには、子どもたちは眠っているかもしれないのです。私たちは、そういう保護者の状況や背景をしっかり知った上で支援しなければいけないのです。

私たちは、いろいろと悩みながらも頑張っている保護者を「よく頑張っていますね」などと、日頃から評価しながら支えてあげることです。そうすることにより、保護者は自信を持ち子どもと向かい合うことができるのです。

## ■演習①

さて、今日は皆さんに、園便り、クラス便りを持ってきていただくようお願いしていました。それを使って意見交換をしたいと思うので、6人ぐらいでグループを作ってください。グループの中で進行役を決めたら、1人5分ずつ、自己紹介と、そのお便りでどういうふうに保護者に伝えているか、良さや工夫を伝えてください。そして、少し質問のやりとりをしてみてください。どうぞ。

\*\*\*意見交換\*\*\*

それでは、今のグループで、自分が学んだことや、こうやりたいと思ったことなどを三つ、お互いに紹介し合ってください。人の話を聞くときは、必ずうなづいたり、「えっ、すごい」などと言って、話しやすくしてあげてください。

\*\*\*意見交換\*\*\*

それでは、たくさんのことを学んだと思いますが、代表者の方に発表していただきたいと思います。お願いします。

- (A) 私は園の教員ではなく、3歳の男の子を幼稚園に通わせている母親です。ただ、私は元々社会福祉士で、普段、相談援助業務や、保護者や保育者の視点もいろいろ考えながら生活していることもあり、今日は参加させていただきました。幾つか園便りを紹介していただきましたが、写真をたくさん載せていたり、教育とは関係ないような、家庭で子どもと保護者ができるちょっとしたことを積極的に載せているところもあり、非常に勉強になりました。
- (B) 現在、保育者3年目で、3歳児を担当しています。私が園で書いているものとは別の園便りやクラス便りを見せていただき、「ああ、こんなこともされているんだな」とか、毎月出すことが当たり前になっていたのですが、毎月出さなくても思ったときに伝えたいことを伝えることも大切なのだと思いました。
- (C) 私もイラストを描いたりして、保護者に分かりやすく見てもらえるよう、思いを載せつつ一方的な押しつけにならないよう、納得してもらえるお便りを目指していたのですが、今回こうやってグループトークをさせていただき、このままでいいのだと自信を持っていた部分と、もっと具体的に子どもの育ちが見えるようにしたり、クラスのことばかりでなく地域のことを入れるのも大事なのだと勉強になりました。
- (D) 私は今保育所でフリーで働いていて、地域交流があったときには、写真と、何を学んでほしいかという狙い、子どものつぶやきなども添えたお便りを、その日のうちに玄関に掲示するように取り組んでいます。

発表ありがとうございました。たくさん学びをされたんですね。皆さん、自分の園の良さを改めて確認できたり、逆に学べたこともたくさんあると思います。工夫の一つとして、園日より欄の下にでも一言書ける1cmか2cmぐらいの一言感想の枠を入れておくと思います。そうすると、「とても楽しく読ませてもらいました」などと書いてくれる保護者も出てくるでしょう。

5歳ぐらいになると、お便りの伝書バトごっこという遊びで、「今日、先生はお便りを渡すから、お母さんに読んでもらって感想を聞いてきて」といって、保護者と子どもとの関わりをつくることができます。時々お便りがカバンの底に落ちたまま返ってきたりして、保護者がきちんと読んでいのかどうか不安になることがあると思いますが、伝書バトごっこをすれば、それを防ぐことができます。

それから、3歳を担当している保育者なら、0歳、1歳、2歳、4歳、5歳のクラス便りも読むことが大切です。5歳を担当している保育者は、0歳から4歳までのお便りを読んでください。子どもの発達には連続していくので、3歳を担当している保育者は、4歳や5歳になるとこういう育ちをするんだなどと知っておかなければいけません。外

で遊んでいれば、自分のクラス以外の3歳や、4歳の子どもと一緒に遊ぶこともあるかもしれません。そのときに他のクラスのお便りを読んでおけば、今はこういう遊びなのだとか、こういうことが育っているのだということが分かります。そうやって園の中で共有することも大事です。皆さんは毎日忙しく、集まって話し合いをする時間がないかもしれませんが、園便りを使えば、今の状況をお互いを知ることができます。そこから「これはどうなの？」と聞いてみたりすることもできます。園便りを外に向けてだけでなく、内に向けて活用することで、私たちはさまざまなことを共有できます。

ある園が実践していることで、いいなと思ったのは、園の職員室にホワイトボードを、1歳、2歳、3歳、4歳、5歳と五つ掛けているのです。子どもはいろいろなところで遊ぶので、3歳の子が5歳の保育者のところで遊ぶこともあります。つまり、担任の保育者の目が届かないところでさまざまなエピソードがあるわけです。それを、保育者が付箋に「ひよこ組の〇〇ちゃんがこんなことをして、すごくよかったです」「すごく楽しそうでした」などと書いてホワイトボードに貼ると、担任はそれを見て、自分の目の届かないところでの子どもの姿を知ることができます。そのことを今度は園だよりに書くと、保護者は、うちの子どもを園全体で見ているのだと感じ、園への信頼感が増していきます。

また、できるだけ専門用語を使わないことも園だよりにおいては大切です。保育の世界は、環境構成など、いろいろな専門用語があると思いますが、できるだけ誰が読んでもわかりやすい表現を心がけましょう。今は、インターネットや紙などいろいろな媒体があるので、それぞれ工夫されるといいのではないかと思います。

## 演習②

それでは、今日は皆さんに写真を持ってきていただいていると思うので、それを使って実際に園だよりを書いていただきたいと思います。書くときは、事実に基づいて書いてください。ある園の玄関に、イモ掘りのときの写真が飾ってありました。イモを持った2歳の子が写っていて、そこに吹き出しで「おイモが掘れました。今日はこれを持ち帰って、お母さんにおイモの天ぷらかスイートポテトを作ってもらおうと思います」と書いてあったのです。そんなことを言う2歳の子がいるのでしょうか。「重いよ」とか、それぐらいのものだと思います。エピソードを書くときは、事実に基づいて書くことが原則です。友達同士で写っているなら、Aちゃんがこう言った、Bちゃんがこう言ったということを事実に基づいて書いてください。

次に、その写真やエピソードから見えてくる、子どもの育ちを、例えば考える力や人を思う気持ち、工夫していること、探求していることなど育っている力を書いてください。

次に、その育っている力が将来どういう場面で発揮されるのか、あるいはどういうときに必要なかという、少し先のことを書いてください。例えば友達の意見を聞いて何か一緒に作ろうとしているなら、相手の話を聞いて自分の考えを言うという力が、小学

校で話し合いなどの勉強を進めていくときに役立ちます。大人になってもそうです。今の育ちは将来にとって大事な芽だということを書いてみてください。

さらに、育てている子どもの姿を伝えつつ、次に、保育者として今後どのように子どもに育てている芽を育てていきたいかについて書くといいと思います。そのために、家庭に協力してもらいたいことがあれば書いてください。子どもたちは今、こういう育ちがあります。そして将来、この育ちはこういうところで役に立ちます。そのために私は、あなたの子どもを一生懸命保育します。しかし、そのためには家庭にも協力してもらわなければいけませんと書けば、メッセージ性が出てきて保護者は納得してくれるのではないかと思います。ただ単に出来事だけを伝えれば「そうですか」で終わってしまいます。

教育というと小学校や中学校に目が行きがちですが、そうではないということを理解してもらうことが大切です。子どもたちが生きていくための根っこの部分を育てているということです。

例えば、相手の話を聞いて自分の考えを言うということが5歳までにきちんと育てているからこそ、小学校で班学習ができます。5歳までは、自分が早く並びたいから友達を押しつけて並ぼうとするかもしれません。友達から注意されて、初めはなぜそんなことを言われるのか分からなかったけれども、だんだん順番を守るということが分かってきます。だから小学校に行ったときに、ルールを守って順番に並んだりすることができるのです。それが育っていなかったら小学校は大変です。話し合い活動をして、自己主張ばかり言って話し合いになりません。そう考えると、私たちの仕事は本当に大事な仕事です。

しかし、なかなかそこが伝わらないもどかしさがあります。残念ながら、教育は小学校から始まると思っている人がたくさんいます。ですから私たちは、私たちの教育の意義を伝えていかなければいけません。その手法の一つが園だよりだと思います。一方通行かもしれませんが、私たちがやっている教育・保育の値打ちを伝えることで、「先生はこんなにやってくれている。こういうことまで思ってくれている」と、私たちを認めてくれる一つのきっかけにもなると思います。保育者がやっていることは当たり前かもしれないけれど、とても大事なことです。

それでは、まず持ってきた写真のエピソードを、事実に基づいて5～6分で書いてみてください。次に、その場面からどのような子どもの育ちが見えるか、どのような力が育てているか書いてください。次に、その力が将来どのような力になっていくかを書いてください。次に、この力をこれからの保育の中でどのように育てていけばいいと思っているか書いてください。また、家庭に協力してもらいたいことがあれば書いてください。

\*\*\*各自記入\*\*\*

それでは、今のグループでもう一度集まり、1人2～3分で、自分が持ってきた写真について説明してください。こういう事実で、こういう力が育っていて、その力が将来こういう力になる。そのために保育をこういうふうに頑張るので、家庭にもこういうふうに頑張してほしいということを発表してください。どうぞ。

\*\*\*意見交換\*\*\*

今やっていただいたように園だよりを書くことで、保護者に、小学校の前にもっと大事な教育や保育があることに気付いてもらえます。私たちは、単に保護者が働く間子どもを預かる施設の職員ではありません。子どもたちが初めて家庭から小さな社会に出て、最初に会おう先生が私たちなのです。その責任と自負心を持ってください。そのためには、私たちの仕事の大事さをしっかりと伝えていきましょう。

皆さんはそれぞれ、持っている価値観によって保育観が多少違うと思いますが、それでは困ります。今やっていただいたように、1枚の写真について、別に難しい話をしなくても「こういう考え方もあるよね」「こう思っているのだろう」「こういうことも言えるのではないか」とみんなで語り合うことにより、皆さんの保育観が整っていきます。ですから、今やったことを園内でもそのままやってみてください。そうすることで、今まで気付かなかったことに気づき、保育者としての資が向上していきます。

今回の保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、これまで以上に子育て支援が重要だとされています。多様化する保護者のニーズや悩み、不安に応えていくためには、保育者の資質向上は欠かせません。その意味においても、今やっていただいたようなことが大切になってきます。

日本国憲法では、一人ひとりが幸せに生きていくことが保障されていますが、残念なことに、人が人として生きていくことが困難な状況があります。家庭的な事情など、さまざまなことが絡み合い、生きづらいこともある世の中です。言葉を用いて自分の要求を伝えることのできない乳児は、それと同じです。泣いてばかりで、おむつを替えてほしいということと言えません。しかし保育者は一生懸命、その表情や様子を見て、その子の気持ちを考え、おむつを替えてあげます。子どもたちの思いを代弁している素晴らしい仕事です。また、思うように自分を発揮できず、たたいたり、かみついてしまうかもしれません。その子なりに一生懸命何かを行動として訴えているのです。してはいけないことは教えなければいけません、保育者は、その子がそのような行動をしてしまう気持ちや内面を感じ取ってあげます。つまり私たちは、幸せに生きる権利を阻害されている子どもたち、あるいは保護者たちの代弁者なのです。それだけ重要な仕事であることを今一度理解していただきたいと思います。自分で自分の命を守ることができない子どもたちの代弁者、つまり通訳の役割を、保護者や行政に対して務めなければいけません。

そして私たちは、保護者の代理人にもなります。子どもの権利を守りたくても、言え

ない保護者がいます。過去の出来事からいろいろな思いを引きずり、ずっと苦しい思いをしている保護者もいます。そういう保護者たちが安心して子育てできるためには、保護者の心を理解し、しっかりと支援できる、保護者の心の代弁人にも私たちはならなければいけません。

それを実践していく上で大切にしたいのは、常に利用者の最善の利益に向けて行動することです。子どもの利益を最善に考えて行動し、その思いに触れ、しっかりと対応していく。そして、子どもやその保護者に対し、正確な情報をきちんと伝える。そのためにも、保護者や子どもが今どのような状態で、何がしたいのか、何を求めているのかということ、私たちは知っておかなければいけません。

私たちの仕事では、温かい心を寄せるとか、温かいまなざしを子どもに向ける、乳幼児理解、子ども理解という言葉が当たり前のように使われています。つまり私たちの保育の仕事は、子どもの心に寄り添い、その心をキャッチし、できるだけその思いに近づき、それをくみ取って支援していく仕事なのです。ですから非常に難しいのです。

例えば去年、3歳のクラスの保育者がグラウンドの真ん中で、おだんごを作っていました。すると一人の女の子が勢いよく、その保育者にぶつかってきました。保育者はそのとき、とっさに「痛い。危ないじゃないの。気を付けなさい」と言ってしまったのです。しかし、私たち保育者がそこで本当に考えなければいけなかったのは、なぜこの子はそんなに勢い余ってぶつかってきたのかということです。その保育者はその後「どうしたの？」と聞きましたが、その子はしばらく黙った後、「何でもない」と言って元のところへ戻っていきました。私もその様子を見ていましたが、なぜあのようぶつかったのか不思議に思い、その子の後を追っていくと、その子は赤いモミジを持っていて、それをばらばらともみ碎いて粉にしてしまったのです。つまり、その子は、真っ赤なモミジを見つけて大好きな保育者に早く見てもらいたくて、「すごいね」と言ってもらいたくて、保育者に共感してもらいたくて、だから力いっぱい心と体でぶつかってしまったのです。しかし、保育者は「痛い、危ない」と返してしまった。その子はそこで止まってしまったのです。

その子がなぜぶつかってきたのだろうと考えて「どうしたの？」と言えるか、「痛い、気を付けなさい」と言ってしまうか。そこが保育者の質が問われるところだと思います。そう考えたときに、私たちは、子どもたちが何をしたいのか、何を求めているのかということを常に追求し、それを分かりやすく伝えていくコーディネーターの役を担っているとと言えます。日頃からそういう態度でいなければ、子どもの心を理解する力はなかなか身に付きません。そういう意味で、私たちの仕事は常に研さんを積んでいく必要があると思います。

指針や教育・保育要領は時代とともに変わりますが、その根底にあるのは、私たち自身の人間性が問われているのだと思います。保育では、保育者の人間性が如実に出ます。私たちの仕事は、子どもの心に寄り添い、理解することをとても大事にしています。私たちが子どもの心に寄り添っていかなければ、子どもの心は見えてきませんし、保護者

の心も見えてきません。それだけ大事な仕事だと思っています。

どうか明日からこれまで以上に、子どもたちとの毎日を大切にしながら、その子たちの将来が生き生きと輝くために、また最初に出会う先生として保育を重ねていただければと思います。